コミュニケーション能力開発のための試み

── ビデオレター制作活動とその実践例 ──

茜　八重子

キーワード
コミュニケーション能力開発　プロジェクトワーク　ビデオレター制作
国際交流学生　異文化理解

はじめに

近年、日本語学習者のコミュニケション能力を高めるためのプロジェクトワクが様々になされてきているが、創造性(creativity)、生産性(productivity)、表現力(expression)を喚起する学習活動の報告はあまりない。本稿ではこの点を踏まえ、ビデオレター制作をプロジェクトワークの精神、1)学習者が自ら計画し、2)作業を行い、3)その作業結果を一つの制作品にする、に織り込んだ学習活動を紹介する。この学習活動は実践的かつ娯楽性もあり、また学習者のレベルや人数を考慮したコースデザインが不可能な場合にも有効である。

1．ビデオレターとは

ビデオレターとは手紙を映像化したもので、映像と音声が一体化しているため、文字で伝える手紙、声で伝達する電話、一瞬を捉える写真などに比べ、はるかに多い情報をコンパクトに伝えられるという利点がある（大林・小林

1996)。この利点をプロジェクトワークとして学習活動に利用することによって、学習者の統合的な日本語のコミュニケーション能力が、さらに高められるのではないだろうか、というのがこの試みの出発点である。

2．実施目的

日本語初級後半から中級の学習者を対象に、学習者が「映像作家」となってビデオレターを制作する過程において、以下の三つの側面でコミュニケーション能力を高めることを目的とする。

（1）ビデオレターを制作するための企画、撮影から、できあがったビデオレターを編集、鑑賞するまでの過程で、四技能の強化と日本語の統合的コミュニケーションの能力を強化する。

（2）ビデオレター制作を媒介に、教師対学習者、学習者間そして学習者対地域社会の人たち（学校関係者、他学生など）とのコミュニケーションが促進される。

（3）ビデオレターの制作者となった学習者が、レンズを通して目標文化の多様性を知り、それを異文化理解に役立てる。

3．国際交流学生とビデオレター制作導入の意図

被験者は、大東文化大学の国際交流センターが毎年受け入れている公費留学生で、一般に「交流学生」と呼ばれている。彼らは来日に際し、本国での日本語学習歴が問われていないため、日本に来てから本格的に日本語学習を始めるケースが多い。そのため、当初から4技能習得面において非常にばらつきが多く、また、日本での滞在期間が10カ月と短いため、日本語学習は初級後半か中級前半で終了する場合が多い。しかし、あえて帰国をひかえた最後の学期に、このプロジェクトワークを実施しようと思ったのは、映像にした「留学の思い出」を母国の家族や先生方、友人たちと分かちあって欲しいことと、コミュニケーション能力の向上を期待したからであった。試みに、1997年度生（以下、97生と略す）4名に「会話・視聴覚教育」の11週分の22コマを使用し、実施し

てみた。期待以上の反応が得られたことがきっかけになり、1998年度生（以下、98生と略す）５名に「総合日本語２」の時間10コマを使用し、制作活動を行った。98生は97生に比べ、約半分の活動時間数である。

交流クラスに在籍した学生、1997年度生と1998年度生の内訳は次のようになる。

1997年度生

国籍	母語	人数	日本語学習期間
アメリカ	英語	1	１年半
オーストラリア	英語	3	1.8～４年

1998年度生

国籍	母語	人数	日本語学習期間
インドネシア	インドネシア語	1	１年　（注１）
ニュージーランド	英語	1	２年半
エルサルバドル	スペイン語	1	２年　（注２）
中　国	中国語	2	９カ月

４．学習活動の内容と実施方法

97生の場合は一週90分２コマ使用が可能であったため、各学習活動に沿って丁寧に授業を進めた。一方、98生の場合は、一週１コマと時間が限られていたため、途中の作業手順の省略が相当あった。制作活動には準備、制作、仕上げと時間がかかるが、半分以下のコマ数でどの程度の作品ができるかは一つの試みでもあった。

次頁の各学習活動は、90分11コマ想定で最終プロジェクトまで終了するように組み立てた。また、一つのワークを時間をかけて拡大・縮小したり、複数のワークをユニットにすることもできるように配慮した。なお、学生に配付する各資料は、クラスのレベルに応じて教師が適宜に手を加える（ルビをふる、単語表の添付など）ことを前提としている。

〔学習活動１〕

（内容）オリエンテーション

スケジュール表(注３)に沿って、このプロジェクトワークの趣旨を理解する。ビデオが、どのようにしてコミュニケーションの道具として使われるようになり、またどのような可能性をもっているか、などについて話し合う。

（授業の流れ・時間配分）

１．講義　「プロジェクトワークの概要とビデオコミュニケーションについて」
　　教室内90分

２．宿題　「学習活動３」に備えて、「ビデオ分析」のためのＴＶ番組を録画する。ただし、「お笑い番組」などではなく、教育性のある番組に限る。

（技能別学習目標）

★聞く　オリエンテーション（授業内容や課せられるタスクについて理解する）

★話す　わからない点、確かめたい点を質問する。

★読む　ビデオ分析のための要項を読む。（配付資料）

（資料１）ビデオ分析のための要項（本稿に添付）

〔学習活動２〕

（内容）ビデオ分析の要項に沿って、モデル分析を全員で試みる。ビデオの扱いや制作が上達するためには、じぶんたちの目指す分野の作品を分析することが役に立つ。また、いろいろなアプローチを自分のレパートリー加えるための指針ともなる。

（授業の流れ・時間配分）

１．講義　分析の方法について　　教室内30分

２．演習　モデル分析　　教室内60分

（技能別学習目標）

★聞く　教師の指示を聞く、みんなの意見を聞く。

★話す　最近見たＴＶ番組から会話を導入。

教師が準備したビデオを見、その印象について話す。

クラスメートの発言について意見を述べあう。

★書く　要点をメモする。

（留意事項）

教師は、モデル分析用のビデオを二本（両者比較しやすい内容のもの）用意する。

〔学習活動３〕

（内容）学習活動２に続く。各自が録画したビデオの概略を最初に説明してからビデオを紹介する。

（授業の流れ・時間配分）

１．演習：全員で分析をする。教室内30分

ビデオ分析と意見交換　教室内30分

「分析の要項」を仕上げる。30分

（技能別学習目標）

★聞く　他の人の説明や意見を聞く。

★話す　要項に沿って、録画した作品について説明する。

感想を述べあう。

★書く　分析要項に書き込む。

（留意事項）

教師は、作品の説明が的確になされているかをチェックする。

〔学習活動４〕

（内容）ビデオカメラの操作に慣れるための試し撮り

カメラ操作に慣れるために資料を読む。編集なしのフルオートで試し撮りをする。

（技能別学習目標）

★聞く　カメラの扱い方、撮影に関する専門用語、試し撮りの方法についての

説明を聞く。

★話す　試し撮りの対象や作業の段取りについて意見をのべあう。

★読む　ビデオ操作のための資料を読んで理解する。

（授業の流れ・時間配分）

1．講義「ビデオカメラの操作方法」教室内30分

2．実習　試し撮り　教室内／外60分

（留意事項・配付資料）

（資料２）「ビデオテクニックを学ぶ」（本稿に添付）

〔学習活動５〕

（内容）作品鑑賞と意見交換

ビデオを鑑賞し、試し撮りの際の問題点や発見を共有する。

（授業の流れ・時間配分）

1．試し撮りテープの試写。　教室内60分

2．感想をまとめる。　教室内30分

（技能別学習目標）

★話す　撮影した場所や状況を説明する。

本撮影に向けての注意点を明確にする。

★書く　要点をメモする。

（留意事項）

試写会用ビデオ機材の確保

〔学習活動６〕ビデオレター制作の前作業

（内容）絵コンテ（絵とは撮影の構図や人物の動きを具体的にスケッチしたもので、コンテは continuity の略。英語では storyboard という）作成について説明。「企画―絵コンテ作成―リハーサル―撮影―編集」までの流れについて理解する。絵コンテは各自が作成し、撮影時に一本化する。編集では、各自が自分の好きな「切り口」をビデオレターに盛り込む。

（授業の流れ・時間配分）

1．講義　「絵コンテ作成のためのポイント」　教室内30分

2．実習　絵コンテの見本を参考にし、実際の作業にはいる。　教室内60分

3．宿題　実習をもとに、各自ビデオレターの内容展開や手紙文について考え、絵コンテを仕上げる。

（技能別学習目標）

★聞く　絵コンデ作成について説明を聞き、理解する。

★話す　手紙文について話し合う。特に、誰に（例えば祖父母、両親、兄弟、先生、友だちなど）どんな内容の手紙を送るか話し合う。

★書く　要点をメモする。

（留意事項・配付資料）

（資料３）絵コンテの見本（本稿では紹介しない）

［学習活動７］

（内容）リハーサルの試し撮りと鑑賞

シミュレーションワークとしてリハーサルを行い、試し撮りをする。ビデオを鑑賞し、試し撮りの際の問題点や発見を共有し、本撮影に備える。必要であれば、試し撮りの結果に基づいて絵コンテを修正する。教師は学生が書いた絵コンテと手紙文をチェックする。特に、手紙文のなめらかさに注意をはらう。日本語学習歴の短い学生の場合は、それなりの表現を尊重する。

（授業の流れ・時間配分）

1．試し撮りテープの試写。教室内30分

2．コメントを交換する。教室内15分

3．絵コンテを仕上げる。教室内45分

（技能別学習目標）

★聞く　教師の指示を聞いて理解する。

★話す　撮影したビデオについて場所や撮影状況を説明する。

作品について感想を述べあう。次回のスケジュールについて話し合い、

本番撮影の参考となる点や改善すべき点を明確にする。

★書く　特に手紙文を明確に書き、教師のチェックを受ける。

（留意事項）

試写会用ビデオ機材の確保。

〔学習活動８〕

（内容）スケジュール表に沿って、校舎内・外で撮影。

（授業の流れ・時間配分）

１．講義　「作業手順について」教室内20分

２．撮影　教室、コンピューター室、国際交流センター、図書館、体育館、食堂、大学正門、貯水池、バス停付近など。

（技能別学習目標）

★聞く　教師やメンバーの発言内容を理解する。

★話す　役割分担を決める。スケジュールを確認する。

★読む　絵コンテの手紙文を確認し、暗記する。

★書く　大切な発言の要点をメモする。

（留意事項・配付資料）

１．制作するビデオレターは30分程度のものだが、編集を想定して60分以内とする。一本の長いテープを使用すると編集にてまどるため40～60分テープを二本使用する。撮影に先立ち、特にカメラの電池の充電を心掛ける。

２．ディレクター、カメラ係、進行係、雑用係などの役割を分担する。

３．撮影現場では撮る側、撮られる側を意識し、状況に合った日本語でコミュニケートすることを心がける。

３．撮影作業を通じて、日本人の行動様式や生きた日本語にふれる。

４．撮影中、教師は進行表に目を通し、撮影の進行が滞りなく進ように折々助言する。

５．ビデオ機材の貸し出し。

（資料４）撮影当日の進行表／役割分担表　（本稿では紹介しない）

[学習活動 9 ・10]

(内容) 編集

主題を明確に、見やすく、無駄のない作品にするために編集をする。

(授業の流れ・時間配分)

1．講義「編集作業について」編集機材のある部屋で20分。

2．編集作業　70分

3．宿題　　次回の発表会までに自分たちのビデオを編集しておく。

(技能別学習目標)

★聞く　編集テクニックについての説明を聞く。

★話す　説明内容について質問する。グループで修正、編集したい箇所、映像に合ったタイトルについて話し合う

★読む　編集作業のマニュアルを読んで理解する。

(留意事項・配付資料)

(資料2-2)　「ビデオ編集テクニックを学ぶ」参照。編集用生テープ、モニターテレビ、その他編集に必要な機材の確保。

[学習活動11]

(内容) 編集したビデオレターを発表する。

(授業の流れ・時間配分)

1．ビデオ発表　教室内70分 (70分)

2．話し合い　教室内20分前後

撮影を通して学んだこと、感じたことを言葉にすることにより、自分たちの作業を振り返る。コースに対する評価を書き、学んだことを確認する。

(技能別学習目標)

★聞く　批評を聞く

★話す　各自ビデオレターの紹介。撮影状況、発見したことや問題点も含め発表する。

★書く　コースに対するコメントや今後の抱負について。

（留意事項・配付資料）

学生に作品を比較、批評させる場合、教師は会話が単調にならないように配慮し、批評意図を明確にさせる。状況に応じた表現、敬語を使わせる。また、教師は学生の自主的な運営を尊重する形でサポートする。

（資料５）

コースについての評価。

（内容については本文７－１：成果と反省を参照）

５．授業内容・考察

５－１：97生の授業内容

ここでは、実施した学習活動の中から、特筆すべき内容を取り出して述べる。

97生は〔学習活動１〕のオリエンテーションからスタートし、２限に〔学習活動２〕へと進む。使われたビデオは、「日本の歴史(1) 縄文時代」（前期教材として使用済み）と「The Press」（報道機関の内部の様子について述べ、BGMが効果的につかわれている）の２本で、分析要項に沿って、全員でモデル分析を試みる。

特に、「分析のための要項」の下記の点に焦点をあてる。

A．1)タイトル2)内容、3)対象視聴者、4)特に焦点をあてている点、

B．1)主/副題として取り上げられているテーマは何か、そして強調されているメッセージは何か、2)制作者の意図、3)どのような視聴者に向けられているか、7)映像と音が一体化しているか、

C．1)この作品の内容は視聴者に適してしるか。もしそうでなかったら、もっと的確なアプローチがあるか。

教師がそれぞれの質問内容を分かり易く説明し、学習者の理解を促しながら発話のチャンスを与えた結果、技能別学習目標の二点において、次のような進歩がみられた。

①画面から大まかな内容を把握し、ポイントや印象を発表する。

②クラスメートの発言に対して意見が加えられるようになる。

〔学習活動３〕では、４名中３名が（１名はデッキの調子が悪く、録画できなかった）ビデオ分析のためのタスクを準備してきた。ビデオ視聴に先立って、２名に録画した「14歳・心の風景」と「父子の断絶」について概略を話してもらう。どちらも社会問題にからめて、人間の心理描写を克明に追求したドキュメンタリーであった。はたしてこのような難しい内容が理解できたのであろうかという危惧があった。しかし、「父子の断絶」について発表したアメリカ人学生（本国で１年、日本で半年の日本語学習）は、要約も良かったし、たとえ稚拙な表現であっても、簡潔できちんと分析の要点に触れていたので感心させられた。「ビデオ分析」に関して、学生たちからは次のようなコメントがあった。

①「分析のための要項」に沿ってモデル分析を試みる経験をしてから、これまで漫然と見ていたテレビ番組の分析ができるようになった。

②一視聴者として批判できるようになった。

〔学習活動６〕では、ビデオレター制作に向けての準備について説明。絵コンテの見本を見せ、さっそく作業に入る。絵コンテ作成はこのプロジェクトワークのハイライトでもあるが、全員初めての経験にもかかわらず、実に楽しそうにイメージを膨らませていた。残りは宿題。

〔学習活動８・９〕でキャンパス内での撮影作業に入ったが、ビデオカメラは他科からの借り物だったため、責任上、教師が全行程に付き合うはめになった。後の「コースへの評価」には、撮り直しも含め、「もっと自由にさせてほしかった」というコメントがあり、大変参考になった。２本のテープに４人分を収録し、編集過程で自分のオリジナル作品を作ることにした。

〔学習活動10〕では個々に編集作業にはいり、最後にタイトル（大東での思い出、幸せ、困ったな？等）を入れ、仕上げた。各自、思い通りの編集を終え、その様子からかなりの満足感が感じられた。

〔学習活動11〕では、できあがった作品を鑑賞。日本のトイレ紹介では爆笑したり、また、日本語の先生方へのインタビューでは、得られた内容にうなづいていた。しかし重大な反省点として、①屋内で撮った映像が全体に暗く、特に

人物映像のピントがぼけている、②（マイクがカメラに内蔵されているため）雑音が入っていることなどが挙げられた。もう一度撮り直したいという声があったが、学期末になったため断念した。

5－2：98生の授業内容

98生は97生に比べ日本語学習時間が短いことが不安材料だったが、時間的制約のために、あえてタスク内容を半分に縮小した。また、新しい試みとして撮影範囲をキャンパス外へと広げた。これは97生の「コースの評価」での要望に沿ったことと、学生たちが新しくできた「留学生会館」をぜひ紹介したいという意図に沿ったためである。

98生は〔学習活動１〕のオリエンテーションからスタートし、これからの授業内容や課せられるタスクについて理解し、続いて、97生の制作したビデオレターを鑑賞し、良かった点、そうでない点について発表。

途中スキップして、〔学習活動６〕に入る。誰にどんな内容のレターを送るかを決め、絵コンテ作成にとりかかる。絵コンテの見本を見ながら絵作成から始める人、手紙文から書き出す人と様々であったが、この作業には前回と同様、全員が非常に興味を示した。

３、４回目のクラスで〔学習活動７〕に入る。絵コンテ作成の作業と平行しながらビデオカメラの操作に慣れるための試し撮りを行う。ちょうど梅雨の時期にあたり、当日は屋内での撮影に切り換えたが、いずれにしても初めての経験であり、全員興奮状態で教室を出て行った。撮り終えてからすぐ再生し、映り具合を全員でチェック。次回の本番に向け、スケジュールと役割分担を板書し、確認しあう。

５回目の〔学習活動８・９〕では、まずキャンパス外の撮影に入る。学バスに乗って（途中の景色をカメラにおさめながら）高坂駅まで行く。車内からは青々とした田園風景や民家を撮り、北坂戸で下車。次に、駅から２分ぐらいの所にある大東文化大学国際交流会館の外観、談話室や学生たちが住んでいる部屋の中を撮る。リハーサル無しで、「部屋の中には、電話と洗濯機と電子レンジ

があります。家賃は3万5千円です」「ここはトイレです」と紹介している。

時間不足のため、ここまでの段階でリハーサルも含め学生の手紙文のチェックがおろそかになりがちだったので、大学に戻ってモニターする。曇り空にもかかわらず映像は悪くないが、やはり学生の台詞が不明確。次回のキャンパス内での撮影時に気をつけるべき点だと反省する。しかし、教師対学生、学生同士でのコミュニケーションが活発になされていて感心した。「先生、これでいいですか。」「Aさん、そこじゃない。あっちでしょう。早く、急いで」などの言葉が飛び交っている。

6回目のクラスでは学生たちの要望に応じ、これまでの実写フィルムを鑑賞。まさに、陶工が一番楽しみにしている「釜出し」の瞬間である。学バスの中から撮った「学校から高坂駅までの通学路」を見ながら、学生が感慨深げに日本語で言う。「先生、雨の日も良い天気の日も、毎日学校に通った道です。ずっと狭いですから、危ない時もありました。いろいろ忘れられません。」「これは全部思い出ですから、編集の時、全部（長い道のり）使いたいです。」常に、このように素晴らしい表現ではないが、互いに言葉で意思の疎通ができるようになっている。例えば、「こうしたらいい？」「ダメダメ、もっと後ろで、……」「（近くの）お弁当やさんはいつもサービスします。やきとり3本」「いいねー」「次の撮影、もっと頑張りましょう」など、聞いていて、こちらも励みになる。40分テープ2本分を鑑賞する。

7、8回目にはキャンパス内の撮影。大学の正門、図書館、食堂、生協、交流センターのスタッフの紹介、学友のバグパイプ演奏をカメラにおさめる。なんといってもハイライトは大東大の「すもう部」訪問。事前に、学生に撮影許可をとるように指示していたので、稽古場や練習風景の撮影を許可してくれたばかりでなく、大中小サイズの三人の「おすもうさん」がインタビューに応じてくれ、私も学生たちも大感激。インタビューとカメラ担当の学生は一生懸命に作業をこなし、満足感が得られたようだった。クラス内の活動では経験できないことの連続で、まさにこのプロジェクトワークのねらいがここで達成されたような手ごたえが感じられた。ちなみに学生からの質問事項を紹介すると、

1)すもうをやっていて、楽しい事は何ですか。大変な事は何ですか、2)すもうしながら勉強するのはどうですか、3)毎日どんな物をたべていますか、4)卒業してもすもうを続けますか、等。各インタビュー項目は学生が考えたもだが、単純明快でポイントをついていると思う。

9回目では、交流クラスで全員の自己紹介の撮影をする。クラスですぐモニターした後、撮り直しを加える。リハーサルなしの自己紹介だったが、日本語の実力が良くわかって、大変参考になった。

10、11回目のクラスで〔学習活動10〕の編集作業に入る。まず全員で3本の終了テープを見て編集に必要な箇所、そうでない箇所を選定させる。編集機材が一台しか無いため、代表の1人に編集してもらう。編集には思っていた以上の時間がかり、全員での鑑賞ができずにコースは終了した。10コマでの制作活動では限界があることを痛感したしだいである。しかし、全員が仕上がった「ビデオレター」を無事手にすることができ、当初の目的が達成されたことには意義があると思う。

6．成果と反省、今後の課題

6-1：成果と反省

本稿ではビデオレター制作の持つさまざまな可能性に着眼し、コミュニケーションの能力を高めるための技能をリストアップし、それに沿って実際に試みてみた。毎回「講義」の時間を設け(98生は30分、98生は15分程度)、「情報インプット」やフィードバックを心掛けた。また、状況に応じて「言語インプット」(学習活動に必要な言語技能や表現、語彙などを教師が学習者に指摘して再確認したり補ったりする)(田中他 1994)を行った結果、「この表現(日本語)は正しいですか」「……の日本語の言い方を教えてください」などと、正確で適切な日本語の表現を体得することに積極さがみられた。教わったことをメモしながら暗記したり、(たとえメモを見ながらでも)実際に使ったりで、好ましい雰囲気が常に感じられた。教師は機材の点検、充電、指示と一人三役をこなして疲れぎみだったが、「おもしろい」とか「クラスは楽しい」という声が相当励みに

なった。

97生と98生の学習態度を比較すると、相対的に98生の方がプロジェクトワークに不可欠の協調性と責任感があり、好奇心が旺盛だった。このことが、次のコースに対する学習者の評価と感想に表れていると思う。回答者は97生が４人、98生５人の合計９人である。(以下、学生の英文を訳す)

A．ビデオレター制作の授業はどうでしたか。(複数回答)

(a)良かった点

1．大東大での勉強を含め、日本での良い思い出になる。(全員の回答)

2．(両親や友達に) 自分が勉強した所が紹介できる。(全員の回答)

3．ビデオレタープロジェクトは、学生が日本での生活を Visual (画面) と Audio (音声) の両面からの記録を創造する良い試み。
(97生 1、98生 2)

4．絵コンテ作成は非常におもしろかった。(97生 3、98生 4)

5．先生のサポートとグループ活動にとても助けられた。(98生 4)

6．たくさん話す機会があった。(97生 3、98生 5)

7．日本語でのインタビューのし方や、説明のための適切な表現がわかって有意義だった。(98生 2)

8．ワークを通じて、いろいろな国からの学生の心がひとつになった。(98生 2)

(b)改善すべき点

1．暗かったり、雑音が入ってる箇所を撮り直したかった。(97生 2)

2．もっとビデオカメラを自由に使わせて欲しかった。(97生 4)

3．グループではなく、個々に違った角度からの撮影をしたかった。(97生 4)

4．機材が古いため、撮影が難しかった。(98生 1)

5．撮影、編集時間が短すぎた。(98生 2)

6．ビデオカメラが一台のため、撮影練習ができなかった。(98生 1)

7．雑音が入りすぎるため、カメラ専用のマイクがほしい。(97生 3、98生 2)

B．授業の進め方はどうでしたか。

1．時間のかけすぎ。授業の進行が遅すぎる。(97生 3)

2．もっと撮影と編集に時間をかけてほしかった。(98生　2)

3．途中、撮影の専門家の説明もほしかった。(98生　1)

4．常に問題を起こすメンバーのために、フィードバックする必要はなかった。(97生　1)

5．制作時間は少なくて当初は心配したが、先生の責任ある指導と学生たちの努力のおかげで、無事完成した。(98生　2)

C．コースについての評価。

1．自由に、かつ創造性を発揮できるクラス。(全員)

2．(インタビュー、説明、質問、発表などで)日本語を話す機会が多く、Speaking Skills が向上したと思う。(全員)

3．良い経験ができた。留学生にはこのようなクラスが必要だと思うので、これからも続けてほしい。(98生　5)

アセスメントシートの結果でみる限り、本プロジェクトワークの目的である1）企画から鑑賞までの過程でコミュニケーション能力が高められる、2）ビデオレター制作を媒介に、学習者間、教師対学習者、学習者対地域社会の人たちとのコミュニケーションが促進されるについては、一応達成されたように思われる。また、日本語の学習歴にあまり関係なく、お互いにカバーしあい、楽しみながらできることも実証された。

6－2：今後の課題

一点目、学習目的の3）学習者がレンズを通して目標文化の多様性を知り、それを異文化理解に役立てるについては次回の課題として残った。つまり、行動範囲を制約せざるを得なかったため、厳密な意味での異文化理解には役立ったと思えないからだ。これはプログラムの組み方にも関係してくる問題である。

二点目は、このワークに費やす時間は90分10コマでは非常に無理があった。98生は昼休み時間を使用したりしてカバーしたが、それでも編集時間が不足したり、また最後の鑑賞会は省略せざるを得なかった。それに、97生の90分22コマ使用では長すぎることも今後の課題として残った。将来はこの二点を考慮に

入れたコースのスケジュールを考えたいと思う。

最後に、ビデオ機材の取り扱いは思っているほど難しいものではない。失敗、ハプニングを上手に活かすことによってさらにコミュニケーションを深めることができるので、より多くの現場の先生方にこのプロジェクトワークを実施してほしいことを述べ、終わりにしたいと思う。

付記　平成八年度全国大学国語国文学学会秋季大会にて発表した内容を本稿執筆者の責任においてまとめたものである。

注１　被験者（女）はインドネシア語（学校や友達と）の他に、バタック語（父親と）、バンカ語（母親と）、スンダ語（地域社会で）、英語（学校や日本で）をそれぞれ話す。

注２　被験者（女）は南米のスペイン語圏で生まれ育ったが、現在オーストラリア在住して８年になる。

注３　コースによってスケジュールが異なるため、本稿では紹介しない。

参考・引用文献

(1) Nunan. David. Designing Tasks for the Communicative Classroom. Cambridge Language Teaching Library, 1989.

(2) Oller, J.W.Jr., Richard-Amato, P.A. Methods that Work. Cambridge : Newbury House Publishers. 1963.

(3) Smith, David Lee. Video Communication : Structureing Content for Maximum Program Effectiveness, Wadsworth Publishing Company, 1991.

(4) 茜　八重子（1998）『ビデオＣＭを授業で使う』月刊日本語　アルク出版

(5) 茜　八重子・田中令子（1996）未発表論文「コミュニケーションの道具としてのビデオ― Video as a Tool for Communications―」

(6) 大林恒彦・小林はくどう（1996）『あなたも映像作家』ＮＨＫ趣味百科１月

—3月
(7) 梶原高男編（1989）『初心者のためのビデオ撮影入門』日本カメラ社
(8) 川口義一（1991）「敬語指導から見た日本語教育と国語教育—プロジェクトワークの可能性—」『日本語学』10-9
(9) 倉池暁美（1988）「中級学習者の日本語日本事情教育におけるグループ研究プロジェクトの試み：異文化間教育心理学の視座から」『日本語教育』66
(10) ————（1990）「学習者の異文化理解についての一考察—日本語・日本事情教の場合—」『日本語教育』71
(10) バルダン田中幸子・猪崎保子・工藤節子（1988）『コミュニケーション重視の学習活動1：プロジェクトワーク』凡人社

資料1　　**ビデオ分析のための要項**

A．まずあなたが分析しようとしているビデオの1）タイトル、2）内容、3）対象視聴者、4）特に焦点をあええいる点、5）馬的について簡単に紹介しなさい。

B．1～8の項目についえ、プログラムの内容を記述しなさい。

1）主／副題として取り上げられへシるテーマは何か。そして強調されているメッセージは何か。

2）制作者の意図はどこにあるのか。

3）どのような視聴者に向けられているか。（男性か女性か、成人か未成年かなど）

4）どのような目的をもって制作されたものか。

5）どのような状況でこの作品は制作されたと思うか。

6）どんなジャンルにぞくするか。

7）映像（visual）と音（audio）が一体化しているかどうか。

C．1～4の項目から2つ選んで分析し、それについて述べなさい。

1）この作品の内容は視聴者に適しているか。もしそうでなかったら、もっと適確なアプローチがあるか。

2）どんな音（audio）の要素がどのように使われているか、そして、特に効果的だったものとそうでないものは何か。

3）作品の根底にながれているものは何か。

4）視聴者にとって、適切なレベルの言語が使われているかどうか。

資料2　　**ビデオテクニックを学ぶ**（大林・小林　1996）

2．1-1　ビデオワークの基本

A．カメラの構え方

① まず、両足を肩幅程度に開く。背筋を伸ばし、下半身を安定させる。

② 撮影中は右手でカメラのグリップをにぎり、左手でレンズを操作する。両肘両脇をしっかりしめる。

③ 片方の目でファインダーをのぞき、もう片方で周囲の状況を判断する。

B．ショットのサイズについて

① ロングショット (long shot)

場所を示すのに有効なショット。

② フルショット (full or medium long shot)

人と周りの関係を示すときに使われるショット。

③ フルフィギアーショット

人物の全身を入れるショット。

④ ニーショット (knee shot) (3/4 shot)

人物の膝から上を撮るときに使われるショット。

⑤ ウエストショット (waist or medium shot)

人物の腰から上を撮る。

⑥ バストショット (bust or medium cose up shot)

足物の胸から上。ビデオでは基本となるショット。

⑦ アップショット (up shot)

顔の表情をとらえる。ビデオでよく使われるショット。

⑧ クローズアップ (cose up or shoulder shot)

顔の表情を強調する。

C．カメラアングルについて

①ハイアングル (high angle)

被写体を見下ろすアングル。

②水平アングル (level angle)

被写体を水平に見るアングル。

③ローアングル (low angle)

被写体を見上げるアングル。

④オーバーヘッドアングル (overhead angle)

真上の位置から被写体を見るアングル。

2．1-2 カメラワークの基本

A．ズーミング (zooming)

①ズームイン (zoom in)

被写体を次第にクローズアップにして引きつける手法。

シーンの最初や、主役を紹介したいときなどに使う。

②ズームアウト（zoom out）

最初に被写以のクローズアップを見せておいてから、次第に被写体を遠ざける手法。

B．パン（panning）

全景を撮ったり、動く被写体をカメラが左右に追う。

人混みなどを撮るときに使われる。

C．ティルト（tilt）

カメラをゆっくり上に向けながら撮ったり（tilt up）、上から下へとダウンさせる（tilt down）

B．ドーリー（dolly）

気かない被写体に自分から近づいたり（dolly up）離れたり（dolly down）する撮りかた。

2．2　ビデオの編集テクニックを学ぶ

2．2-1　編集しない撮影のポイント

①撮りたいものを決めてから撮る。

②失敗を避けるために、全体の時間配分や構成を大まかに考える。

③撮影中に撮りミスをしたら、失敗した箇所までテープを巻き戻し、やり直す。

④スタートボタンを押す前にリハーサルを行う。

⑤前のショットと同じショットにならないように構図を考える。

⑥状況が分かるようにナレーションを入れる。

⑦作品の始めに制余の意図、終わりにはまとめのナレーションを入れると良い。

2-2　編集作業の基本

ビデオ編集には「インサート編集」と「つなぎ撮り編集」（「アッセンブリ編集」）の二種類がある。ここでは、ＮＧは取り除いて、別の新しいテープに、撮影順に見せたいカットの映像と音声を次々につないでいく「つなぎ撮り編集」について説明する（次頁図①参照）。

図①　インサート編集とつなぎ撮り編集（梶原1989,106）

2.2-3

A.カット表の作成（次頁図③参照）

①あらかじめテープ全体をよく見て、残す部分とカットする部分を決める。

②テープを最初まで巻き戻したら、テープカウンターを「0000」にセットする。

③使いたいシーンが始まったらポーズをかけてカウンターの数字や映像内容、編集終了時タイミングなどを編集用の「カット表」に書き込んでいく。
タイミングは映像と音声のどちらでも、自分がよく分かる目安を見つけて編集終了点を決める。

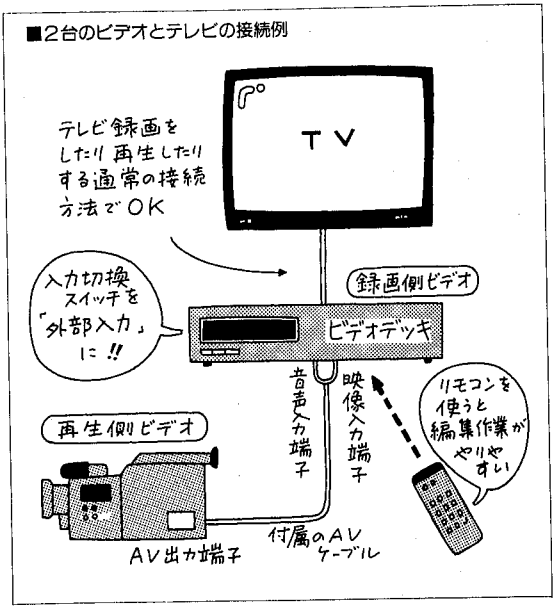
④再び再生して不要なところは、とばしながら続ける。

B.ビデオカメラとビデオデッキの接続
（図②　参照）

①録画側でビデオの入力切り替えスイッチを「外部入力」にする。

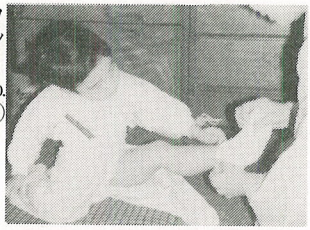
②再生側ビデオの映像出力端子と録画側ビデオの映像入力端子をピンコードでつなぐ。
ビデオカメラでは附属のAVコードを使う。

③音声出力端子と音声入力端子も同様につなぐ。こうしておいてから、送り側のカメラを再生すると、デッキを通じてテレビに画像、音声が映る。



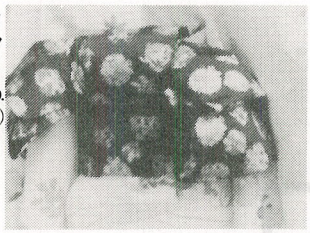
図②　二台のビデオとテレビの接続例（梶原1989,107）

カットNo.①



カットNo.②

カットNo.③



カットNo.④

カットNo.⑤

カット表

カットNo.	カウンター	カット内容	編集終了点のタイミング
1	12～40	おばあちゃんに足袋をはかせてもらう	みずきの声「くすぐったいよ」
2	52～75	着物を着る	おばあちゃんの手もとにズームインしてから約5秒
3	89～105	帯のでき上がり	クルリとこちらを向き直ろうとした瞬間
4	120～132	着物を直す	声「あんまりはしゃぎすぎちゃだめよ」「ハーイ!!」
5	155～170	着付けがすんでおすまし	すまし顔からニッコリ笑ったところ
6			
7			
8			

編集終了点のタイミングの上手な決め方

●特徴のある動作（手を上げる、舌を出す、ふりむく、何か拾う、など）

●話し声の内容（とくに声がはっきり入っているテープでは大切。話がぷっつりとぎれないように、区切りのよいタイミングをさがしましょう）

●秒数（動きのない画面や、変化の少ない画面で終了する時は、その画面になってから何秒たったら、というように大体の時間を目安にします）

図③　カット表作成例（梶原1989,109）